

ふるさと再発見

～重源上人の里みてある記～

(八) 西宗寺（西方寺・浄土寺）

重源上人は、徳地の^{そまやま}杣山に入り東大寺再建の用材を切り出すかたわら、お寺を各地に建立されました。安養、極楽、西方、浄土寺の四か寺を建立されたことはよく知られていますが、明治維新の^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈により、明治3～4年に多くの寺院が廃寺合併になり、安養寺に二か寺が廃寺合併して、廃寺から一字ずつ取って法光寺と改め、極楽寺は月輪寺に合併して廃寺になり、現在は西村公民館となり阿弥陀如来のみ安置されています。なお、東の薬師堂と西の阿弥陀如来の極楽寺が東西相向き合って建てられていました。

西方寺と浄土寺は、須路の宗徳寺、西大津の^{ほんどうくり}深光寺と共に廃寺合併し、明治四年に西宗寺と改め、沖の原の^{がらん}現在地に本堂庫裡を新築し、昭和五十六年に現在の伽藍を新築しています。

西方寺跡は、新田に墓地のみが残っていて、その南側の田圃が境内地であったとのことです。その一角にはお大師堂を兼ねた公民館があり、宅地の裏には遊阿弥陀仏と書いた大きな石碑があるなど、西方寺の^{こんせき}痕跡をとどめています。

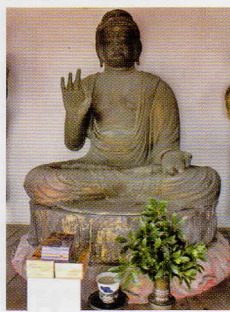
一方浄土寺跡は、林河内、志手原口の北側の山手にある墓地が境内跡で、西宗寺の世代墓もここにありますが。浄土寺にあった阿弥陀堂は、西宗寺境内の下段に移されています。その阿弥陀堂には、阿弥陀如来坐像、聖観音菩薩、地藏菩薩、毘沙門天など四体の仏像は昭和六十二年三月二十日に徳地町指定有形文化財となり、ほかに不動明王を加えた五体の仏像が堂内に安置されています。

堂前の案内板には、「これらの仏像は俊乗房重源上人創建による浄土寺（志手原口）阿弥陀堂に安置されていたが、明治四年本地に^{うちぐ}移されたものである。本尊阿弥陀如来坐像は像高127cm桧材一木造りで内刳りを施し藤原末期の優れた作風を残している。他の三体も田舎風の素朴な感じをまぬかれないが、いずれも郷土の歴史を伝えるものとして貴重である。」と山口市教育委員会の説明があります。

西宗寺の阿弥陀如来は、法光寺の阿弥陀如来と一緒に三重県の東大寺サミットで津市博物館での重源上人特別展に出展され、二体が並べられてあり、その大きさも彫刻の具合も殆んど一致して瓜二つのお姿にビックリしました。重源上人の時代に一緒に製作された仏像ではないでしょうか。



法光寺の阿弥陀如来坐像



西宗寺の阿弥陀如来坐像

(法光寺 東堂 松尾宗茂^{しゅうも})